

彙報

来場者の評価に対応した実施企画の充実・拡大と今後の課題

—2014年度「商店街あそびの広場」実践報告—

清水池義治¹⁾*、村上正和²⁾、長谷川武史³⁾、傳馬淳一郎⁴⁾
三井登⁴⁾、宮内俊一⁴⁾、今野道裕⁴⁾

¹⁾ 名寄市立大学保健福祉学部教養教育部、²⁾ 名寄市立大学保健福祉学部看護学科、
³⁾ 名寄市立大学保健福祉学部社会福祉学科、⁴⁾ 名寄市立大学短期大学部児童学科

キーワード：商店街あそびの広場、商店街、学生ボランティア

1. はじめに

「商店街あそびの広場」(以下、あそびの広場)は、名寄駅前商店街をフィールドに様々な「あそび」の提供を通じて、子ども・親・大学生・商店街関係者との交流を図ることや駅前商店街の活性化を目的に2012年から開催されている。2013年度にあそびの広場では、企画に関与する教員の増加や学内競争的資金の活用、複数学科にまたがった学生ボランティアの参加など学内実施体制の強化が図られるとともに、来場者や学生ボランティアにアンケートを実施して企画自体の評価を行ってきた(これまでの経過は清水池ほか〔2014〕を参照)。

本稿の課題は、2014年9月15日に実施した2014年度「商店街あそびの広場」の実践報告を行うことである。今年度にあそびの広場の概要と変更点を述べたうえで、来場者の動向と評価、ならびにボランティアとしてあそびの広場に参加した学生の評価と意識を通じて、今後の課題を考察する。なお、あそびの広場は大学以外の団体も参画して実施された企画であるが、考察の対象が大学関係中心となった点はご了承願いたい。

2. 2014年度「商店街あそびの広場」の概要と変更点

(1) 2014年度「商店街あそびの広場」の概要

表1は、2014年度「商店街あそびの広場」の実施体制である。今年度は、2014年9月15日・敬老の日に開催した。今回で通算3回目の開催である。昨年度と同様に、商店街あそびの広場実行委員会が主催、MOA美術館北の児童作品展実行委員会およびひまわりの絵コンクール実行委員会の共催による実施体制となった。実行委員会の会合は開催前に4回、開催後に1回実施され、企画内容の検討・調整や実施方法、広報宣伝などに関する議論を行った。会合には、当日の企画を運営する各団体の担当者が出席

表1 2014年度商店街あそびの広場の実施体制

| | |
|------------|---|
| 開催日 | 2014年9月15日(月)・敬老の日 |
| 主催 | 商店街あそびの広場実行委員会 委員長：今野道裕(名寄市立大学短期大学部児童学科) 事務局：石橋典幸(MOA美術館) |
| 共催 | MOA美術館北の児童作品展実行委員会 委員長：高橋藤次(株式会社高橋組) ひまわりの絵コンクール実行委員会 委員長：山田典幸(農家、名寄市議会議員) |
| うち大学関係 | |
| 教員7名 | 内訳 短期大学部児童学科4名、 保健福祉学部社会福祉学科1名、同・看護学科1名 同・教養教育部1名 |
| 当日学生ボランティア | 約40名 |

資料：商店街あそびの広場資料より作成。

*責任著者

住所 〒096-8641 北海道名寄市西4条北8丁目1番地
E-mail: shimizuike@nayoro.ac.jp

した。

名寄市立大学は、昨年度まで関わってきた6名の教員に加えて、保健福祉学部看護学科教員1名が新たに参画し、7名体制となった。昨年度に続いて今年度も、名寄市立大学教育研究費特別枠による事業支援を受けた。教員による学内実行委員会の会合は開催前に3回、開催後に1回の合計4回実施した。あそびの広場当日の学生ボランティア（講義の一環で参加した学生を含む）は、約40名で過去最多となった。

(2) 昨年度からの変更点

表2は、2014年度あそびの広場における実施企画一覧である（当日の実施状況は写真1から写真5を参照）。あそびの広場への新たな団体の参画、あそびの広場に来場した保護者および学生ボランティアを対象に昨年度実施したアンケート結果、ならびに実行委員会での議論などを受けて、今年度のあそびの広場は以下の点で昨年度と異なっている。

第1に、実施企画の充実・拡大である。表2にあるように、今年度は新たに5つの企画が追加された。今年度は、名寄青年会議所と名寄市社会福祉協議会が企画団体へ新たに加わった。前者は子どもたちに市内の各事業所の仕事内容を体験してもらう職業体験（イベント名：「まちづくりワークショップ」）、後者は積み木などのあそびを提供する

「おもちゃ広場」を行った。また、社会福祉法人「名寄みどりの郷」（障がい者支援施設等を運営）が商店街で営業している多世代交流スペース「楽描き」では、敬老の日になみ、高齢者と子どもが一緒にものづくりを行う企画（「わくわくサロン」）が実施された。さらに、名寄市立大学で開講されている講義「フィールドグループワーク」（以下、FGW）¹⁾における地域演習の一環として、子どもと保護者を対象とした「救命体験（BLS、一次救命処置）」講習（担当教員：村上正和）、保護者を対象とした子育て支援に関するアンケート調査を行う「お母さんアンケート」（担当教員：清水池義治）を実施した。なお、救命体験とお母さんアンケートを行った会場には来場者が休憩できるスペースを設けた（写真5参照）。これは、昨年度のアンケートで休憩できる場所がほしいという来場者の要望があったことに対応したものである。他にも、バルーンの会場にはバルーンづくりに詳しい協力者を配置する、商店街路頭に食べ物を提供できる屋台を出店するなど、昨年度のあそびの広場来場者からあった要望に応えられる体制を整えた。

表2 2014年度商店街あそびの広場の実施企画

| | 担当団体 | 学生配置 | 備考 |
|--------------|----------|-------|--------|
| スタンプラリー | 商店街連合会 | | |
| 児童作品展 | MOA | | |
| 生花・茶の湯体験 | MOA | | |
| ひまわりの絵コンクール | ひまわりの絵 | | 空き店舗活用 |
| ジャグリング | FMなよろ | | 空き店舗活用 |
| 迷路 | みどりの郷 | | |
| パン特別販売 | みどりの郷 | | |
| 高齢者交流（新） | みどりの郷 | ○ | |
| 職業体験（新） | 名寄青年会議所 | | |
| おもちゃ広場（新） | 社会福祉協議会 | ○ | 空き店舗活用 |
| 食べ物屋台 | みどりの郷・社協 | | |
| 牧草ロールお絵かき | 大学 | ○ | |
| けん玉・コマ | 大学 | ○ | 空き店舗活用 |
| 人形劇 | 大学 | ○ | 空き店舗活用 |
| バルーン | 大学 | ○ | 空き店舗活用 |
| 折紙・折り染め・絵 | 大学 | ○ | 空き店舗活用 |
| 絵本・紙芝居 | 大学 | ○ | 空き店舗活用 |
| 巨大ひまわりアート | 大学 | ○ | |
| 街角ミニライブ | 大学 | ○ | |
| 救命体験（新） | 大学 | ○（講義） | |
| お母さんアンケート（新） | 大学 | ○（講義） | |

資料：商店街あそびの広場資料より作成。

第2に、大学実施企画を対象としたシールラリーを実施した。来場した子どもにシール台紙を配布し、各あそび企画で1枚ずつ受け取れるシール3枚と、救命体験およびお母さんアンケートで受け取れるシール2枚の合計5枚のシールを集めると、景品として菓子を提供した。ゴールである景品提供場所は、お母さんアンケートの実施スペースである。シールラリーの実施は、あそび企画が主として行われている商店街から、救命体験およびお母さんアンケート会場のある駅前交流プラザ「よろーな」へ来場者の流れを作ることが目的であった。



写真1 街角ミニライブ



写真2 けん玉



写真3 救命体験

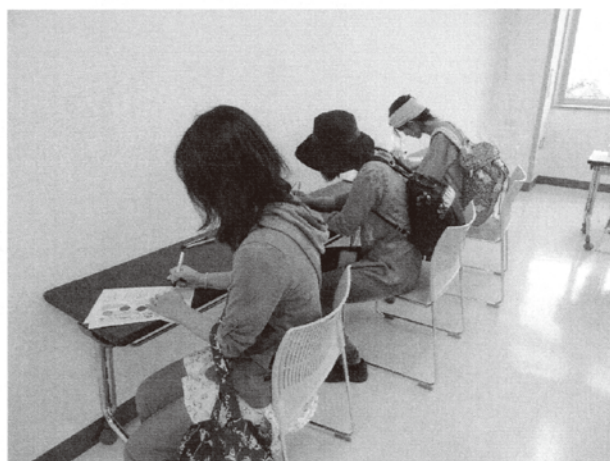


写真4 お母さんアンケート



写真5 休憩スペース

3. 来場者の動向と評価

(1) 来場者の参加動向

あそびの広場に来場した子ども、ならびに保護者の総数は、スタンプラリー用紙の配布数や運営スタッフによる目視などを総合的に勘案して、約400名と推定された。これは昨年度よりはやや多い数である。

来場した保護者を対象としたアンケート用紙は各あそび企画会場で配布したが、大部分のアンケートはシールラリーのゴール地点であるお母さんアンケートの会場で記入を求めて回収した。回答者総数は41で、性別は女性85%・男性12%・無回答3%、年齢層は20代7%・30代72%・40代18%などであった。

あそびの広場参加経験(回答数40)は、初参加が60%、2回目が15%、3回目が25%であった。今回であそびの広場は3回目だが、昨年度に続いて初参加が半数以上を占めた。あそびの広場参加理由(回答数52、複数回答)は、「子どもが参加したかった」58%、「自分が参加したかった」17%、「子どもの絵が展示される」12%などで、昨年度とほぼ同様の傾向である。会場までの移動手段(回答数41)は自家用車59%、自転車22%、徒歩17%であり、昨年度(自家用車40%)より自家用車での来場が増えた。これは、駐車場が併設されている「よろーな」で行う企画が昨年度より増えた、スタンプラリー・シールラリーの起点が「よろーな」であることを事前に周知した結果と思われる。あそびの広場開催を知った媒体(回答数48、複数回答)は、小学校・幼稚園・保育所でのビラ50%、市公報などのビラ27%で、昨年度と同じく、紙媒体のビラが中心である。

(2) 来場者の評価と要望

各企画の参加率(各企画参加回答数/回答者数41)は高い順に、救命体験78%、スタンプラリー77%、お母さんアンケート73%、迷路66%、けん玉・コマ44%などであった。「よろーな」に近い会場で行われた企画の参加率が高い傾向にあり、「よろーな」から離れた西側の企画の参加率は相対的に低かった。また、来場者がどの程度の数の企画に参加したかについては、今年度の平均企画参加数は7.3回で、昨年度の約5回より多くなった。

各企画の評価については、高い評価順に1位から3位までの企画を尋ねた(回答数110)。1位3ポイント、2位2ポイント、3位1ポイントの得点とした場合、1位は迷路41ポイント、2位はスタンプラリー39ポイント、3位は救命体験18ポイント、4位はおもちゃ広場およびバルーンとともに16ポイントであった。

あそびの広場の総合評価(回答数41)は、「とても満足」61%、「やや満足」34%、「どちらでもない」2%、「やや不満足」2%となった。ほぼ全ての回答者が満足と評価する結果である。なお、不満足と回答した回答者の自由記述からはシールラリーのやり方に関する説明不足が指摘されており、これが不満足の原因と考えられる。

表3は、回答者のあそびの広場に対する要望の自由記述の一部である。シールラリーに関する記述内容から、以下の問題点を指摘できる。第1にシールラリーのやり方に関する来場者への説明が不十分だった点である。シール台紙自体に記載された内容では十分ではなく、また、学生ボランティアや大学以外のスタッフにシールラリー企画の周知が徹底されていなかったため、来場者に適切な対応を取れなかった。第2にシール台紙配布の仕方である。来場者がどこからでもラリーを始められるようにシール台紙は各企画会場へ均等に配布したが、「よろーな」を起点とする来場者の流れができたため、「よろーな」では台紙が足りなくなる問題が生じた。

来場者の商店街への要望(回答数91、複数回答)としては、「空き店舗の活用」(選択数21)、「子どもの遊び場の充実」(同20)、「トイレの設置」(同10)、「イベントの充実」(同8)、「駐車場・駐輪場の充実」(同8)などが挙げられた。

表3 あそびの広場に対する要望の自由記述(来場者、一部)

-
- ・スタンプラリーで食事のできる店があると、ついでにお昼にしようか、ということもできるのでは？
 - ・人形劇、紙芝居、街角ライブなど紙に時間が書いてあると、それに合わせて行けるのもっと行きやすいと思います。学生さんがたくさん声をかけてくれてどこに行っても楽しそうでした。
 - ・トイレのある場所を地図などに表示してもらいたい
 - ・とっても楽しかったです。でも、職業体験の日とずらしてもらえたら、子供はもっと楽しめたと思う。やりたいたい事とやれる事が限られていた。
 - ・大人が休めるスペースが欲しい。無意識に結構歩いていて疲れた。
 - ・スタンプラリーで、スタンプだけ押ししてもらいに入るのには申し訳ない気持ちもあります。店で、その日限定の商品とかあればいいかとも思いました。できれば100円～500円程度。
 - ・年々発展しており、楽しみです。このまま、子どものためのお祭として続いて行くとうよいなと思います。
 - ・イベントの場所をもう少しわかりやすく。
 - ・スタート地点でシールラリー用紙が足りなくなっていたようなので、その点は改善できるかと思う。あそびの場所のマップと商店街スタンプラリーのマップのレイアウトを統一するとより見やすい(別々のイベントなので仕方がないが)
 - ・もっと情報を周知してほしい。シールラリーの仕方が分からなかった。
 - ・子ども達が楽しそうだったし、大学生との交流もできて良かったです。続けてほしいです。
-

資料：来場者向けアンケート結果より作成。

註：一部表現を修正している。

4. 学生ボランティアの評価と意識

(1) 学生ボランティアの評価

学生ボランティア(講義による参加も含む)へのアンケートはあそびの広場当日の作業終了後に実施した。回答者数は28で、約3分の2の回答率である。回答者の性別は全員が女性、学年では1年が43%、2年が25%、3年が32%である。所属学科は児童学科53%、看護学科39%、栄養学科4%、社会福祉学科4%、出身地は名寄市7%、名寄市を除く道内64%、道外29%となった。昨年度と比して看護学科の学生が多い。今回加わったフィールドグループワーク(FGW)による参加学生は、全員が看護学科3年である。参加時点でのボランティア頻度は、「月に1～2回」14%、「半年に1～2回」36%、「年に1～2回」25%、「ほとんどしていない」14%、「今回が初めて」11%である。昨年度と比較して、ボランティア経験のある学生が多い。ボランティアとして関わった企画を尋ねると、各企画3～6名の回答者数であった。

あそびの広場への要望(回答数30、複数回答)は、「特になし」が47%で最も多く、次に「休憩時間の確保」23%、「その他」17%、「あそびの広場参加時間の確保」10%、「企画段階から参加」3%(1名)といった順となった。休憩時間が取れない大きな要因は、学生ボランティア数自体の不足で人員に余裕がないためと思われる。「その他」に関する自由記述には、来場者と同様に人形劇など公演時間が事前に決まっているものに関してはパンフレット等への公演時間記載、打ち合わせ不足による担当企画内容の理解不足、会場近くのトイレ確保などがあった。

今回、あそびの広場に参加して商店街のイメージが変化したかを問う質問には、57%の回答者が「変わった」、43%が「変わらない」と答えた。この比率は昨年度とほぼ同じである。変わった理由としては、たくさんの人が商店街に集まっていたことや商店街の店を新たに見知ったことが挙げられていた。一方、変わらなかった理由は、商店街を従来から知っていたことや商店街を当日歩き回れなかったことなどである。本稿では学生の商店街に対するイメージのアンケート結果の詳細は省略するが、昨年度と同様に、商店街に確たるイメー

ジを持たない学生が今年度も多かった。そういった中で、実際に商店街をフィールドとして行われるあそびの広場に参加することを通じて、商店街に関する新たな発見をする学生も多いようである。

(2) あそびの広場ボランティアの動機と成果

今年度のアンケートでも、清水池ほか〔2014〕で使用したボランティア活動動機測定尺度 20 項目および活動成果測定尺度 18 項目の合計 38 項目の質問を設定した。回答結果には「強くそう思う」5点、「ややそう思う」4点、「どちらとも言えない」3点、「あまりそう思わない」2点、「全くそう思わない」1点の得点を付け、各項目の平均点を求めた。

表4はボランティア活動動機測定尺度の平均点である。講義 (FGW) として参加した学生 (「2014 (FGW)」, 9名) と純粹にボランティアとして参加した学生 (「2014 (FGW 以外)」, 19名) とでは動機と成果が異なると判断し、別々に表記している。また、比較するために2013年度の数値も示した。2014 (FGW 以外) では「人に喜んでもらえる」(4.60)、「自分の生活や将来にボランティア活動を通じての経験が生かせる」(4.53)、「人や社会の役に立てる」「活動を通じて積極的に社会参加できる」(4.47) で特に平均点が高い。2014 (FGW) でも2014 (FGW 以外) と同じ項目で平均点が高いが、2014 (FGW 以外) と比較すると平均点の水準は低い。講

表4 学生ボランティアの活動動機測定尺度の平均点

| | 単位：点 | | |
|-------------------------------|-----------------------|-------------------|------|
| | 2014 (FGW 以外) n=19 | 2014 (FGW) n=9 | 2013 |
| 喜んだり楽しんだりできる | 4.47 | 3.25 | 4.45 |
| 人はお互いに助け合わねばならず、自分にもその義務がある | 4.20 | 3.50 | 4.00 |
| 自分の持っている知識、技術を使う練習になる | 4.27 | 3.38 | 4.45 |
| 余暇が有効に使える | 3.80 | 3.25 | 4.27 |
| 対象者の苦しみが和らぐ | 3.69 | 2.88 | 3.18 |
| 人に喜んでもらえる | 4.60 | 4.13 | 4.55 |
| 自己を再発見し、成長させることができる | 4.20 | 3.13 | 4.09 |
| 対象者が積極的に社会参加できる | 4.36 | 3.38 | 3.73 |
| 何らかの報酬や返礼が期待できる | 3.67 | 2.75 | 2.91 |
| 社会の一員として当然のことだ | 3.87 | 2.75 | 3.36 |
| 毎日の生活に充実感が出る | 4.20 | 3.25 | 4.09 |
| 人や社会の役に立てる | 4.47 | 3.75 | 4.09 |
| 自分の生活や将来にボランティア活動を通じての経験が生かせる | 4.53 | 3.88 | 4.73 |
| 対象者が喜びを感じることができる | 4.33 | 3.25 | 4.18 |
| 友人を得ることができる | 3.40 | 2.50 | 3.09 |
| 自分の知識、経験、技術を活かすことができる | 4.27 | 3.50 | 4.09 |
| 他のボランティアと楽しく活動できる | 4.13 | 3.63 | 3.73 |
| 活動を通じて積極的に社会参加できる | 4.47 | 3.75 | 4.18 |
| 教員・友人などから誘われたから | 3.87 | 3.13 | 3.91 |
| 商店街に興味があったから | 3.67 | 2.75 | 3.18 |

資料：学生ボランティア向けアンケート結果より作成。

註：「強くそう思う」5点、「ややそう思う」4点、「どちらとも言えない」3点、「あまりそう思わない」2点、「全くそう思わない」1点として計算。

義に伴う義務的な参加と自由意志にもとづく参加による違いと思われる。概ね3点以上の平均点となっているが、「友人を得ることができる」は全項目の中では相対的に低く、これは2013年度と同様の傾向である。2013年度の平均点は、2014（FGW以外）と2014（FGW）のちょうど中間的な水準である。2014（FGW以外）は2013年度と比較して、一部項目で例外も見られるが、概ね高いか同じ程度の平均点となった。

続いて、表5にボランティア活動成果測定尺度の平均点を示した。2014（FGW以外）の平均点は非常に高水準であり、ほぼ全ての項目で4点以上となった。特に、「あそびの広場に参加してよかった」（5.00）、「活動そのものが楽しめた」（4.80）、「やりがいが生まれた」「対象者や他のボランティアなど人と活動を共にする喜びを感じた」「気持ちの充足感が生まれた」「人や地域に貢献しようという気持ちが芽生えた」（4.60）で高かった。「来年もあそびの広場に参加したい」は4.71点と高く、ボランティアに従事した学生には大きな達成感、充実感が得られたことを示唆している。

2014（FGW）の場合、平均点水準は全体として低いものの、概ね3点から4点の間に平均点が分布している。平均点が高い項目は、「活動そのものが楽しめた」（4.13）、「気持ちの充足感が生まれた」（4.13）、自分のできることで社会と関わり、人の役に立つことができた」（4.13）などである。一方、「仲の良い友達ができ」「来年もあそびの広場に参加したい」で平均点が2点台だが、同じ学科学年の学生と全ての時間帯を通して同一の企画を担当したこと、講義による義務的な参加といった点が要因と思われる。

表5 学生ボランティアの活動成果測定尺度の平均点

| | 単位：点 | | |
|---------------------------------|---------------------|------------------|------|
| | 2014（FGW以外） n=19 | 2014（FGW） n=9 | 2013 |
| 仲の良い友達ができ | 3.53 | 2.13 | 3.27 |
| 活動そのものが楽しめた | 4.80 | 4.13 | 4.73 |
| 人に対して思いやることを意識できた | 4.33 | 3.63 | 4.45 |
| 活動通じて自分自身が成長できた | 3.93 | 3.75 | 3.91 |
| 活動を通じて喜びや感動を経験した | 4.33 | 3.63 | 4.45 |
| 対象者や他のボランティアから様々なことを教えられて勉強になった | 4.27 | 3.25 | 3.64 |
| 必要とされていることが実感でき自信につながった | 4.07 | 3.25 | 3.73 |
| やりがいが生まれた | 4.60 | 3.25 | 3.73 |
| 対象者や他のボランティアなど人と活動を共にする喜びを感じた | 4.60 | 3.13 | 4.18 |
| 気持ちの充足感が生まれた | 4.60 | 4.13 | 4.27 |
| 「もっと～したい」など自分自身を高める目標が生まれた | 3.93 | 3.50 | 4.45 |
| 新しい出会いがあり、人間関係の輪が広がった | 3.93 | 3.38 | 3.09 |
| 自分のできることで社会と関わり、人の役に立つことができた | 4.27 | 4.13 | 3.91 |
| 対象者の幸福・安寧のための新たな目標ができた | 4.00 | 3.00 | 3.73 |
| 人や地域に貢献しようという気持ちが芽生えた | 4.60 | 3.50 | 4.18 |
| 日常生活の中で人との対応が好ましい方向に変わった | 4.53 | 3.38 | 3.64 |
| あそびの広場に参加してよかった | 5.00 | 3.88 | 4.91 |
| 来年もあそびの広場に参加したい | 4.71 | 2.75 | 4.91 |

資料：学生ボランティア向けアンケート結果より作成。

註：「強くそう思う」5点、「ややそう思う」4点、「どちらとも言えない」3点、「あまりそう思わない」2点、「全くそう思わない」1点として計算。

2013年度と比較すると、2014 (FGW 以外) は、『もっと～したい』など自分自身を高める目標が生まれた」の項目を除く項目で、平均点が高まるか同じ水準となった。それに対して、2014 (FGW) は2013年度の平均点を下回っている項目が多い。なお、2013年度に相対的に平均点の水準の低かった項目である「新しい出会いがあり、人間関係の輪が広がった」は、2014 (FGW 以外) で3.93、2014 (FGW) で3.38となり、ともに2013年度を上回った。昨年度のアンケート結果を踏まえ、今年度は来場者や他団体スタッフとの交流を意識して行ったこと、子どもだけでなく保護者ともコミュニケーションを取る企画が増えたこと、学生ボランティア担当を2交代制から3交代制へ細分化してたくさんの企画に関われるようにしたこと（あそび企画のみ）が理由と考えられる。

なお、今年度は学生の主体的・積極的参画を促すことを意図して、7月下旬に学生実行委員会会合を設定したが、実際に参加した学生は少なかった。現状では当日活動のみの受動的な関わりに留まっている場合がほとんどで、企画段階からの関わりなど学生の主体性・積極性を引き出す余地が残されていると言える。

5. おわりに

本稿では、2013年度のあそびの広場に対する来場者や学生ボランティアの評価に対応した、2014年度あそびの広場の変更点や企画内容の充実・拡大について取り上げた。今年度は、あそびの広場に参画する団体がさらに増えたほか、連携教育科目に係る地域演習があそびの広場で行われ、企画内容の充実・拡大が実現された。それに対する来場者の評価は概ね高かったと言えるが、当日の運営方法や事前準備作業などに修正すべき点が見出された。また、学生ボランティアの活動動機・成果測定尺度分析からは、昨年度以上のボランティア成果が得られている点が示唆されたが、講義の一環で参加した学生の動機・成果測定尺度はやや低い水準にあることが分かった。ただし、昨年度は相対的に低かった項目の平均点が上がるなど、成果に対応した修正で改善が進んでいることも確認できた。

今後の課題としては、学生ボランティアや他団体の企画スタッフとの事前調整・情報共有を丁寧に行うことで来場者への企画の説明内容を統一かつ容易にすること、学生ボランティアの絶対数増加に加え、講義参加を含む学生の主体的参画を促す工夫が求められる。

【註】

- 1) フィールドグループワークは保健福祉学部3年次に開講されている連携教育科目である。5～10名程度のグループに分かれて演習を行う。栄養・看護・福祉の各分野の知識を活用し、幅広い年齢層の地域住民を対象に事業・行事を企画・実施することを通じて、保健医療福祉が連携した仕組みづくりや機能的な連携を学ぶことを目標としている。

【参考文献】

- 清水池義治・長谷川武史・傳馬淳一郎・三井登・宮内俊一・今野道裕 [2014] 「地元商店街をフィールドとした子どものあそび空間の創造—2013年度『商店街あそびの広場』実践報告—」『地域と住民』第32号、pp.69-82、2014年3月

【付記】

本稿は、平成26年度名寄市立大学教育研究費特別枠による研究・事業支援『あそびの広場』—『児童文化』で学生と子ども・地域をつなぐ—における成果の一部である。